

三陸の海を放射能から守る

岩手の会

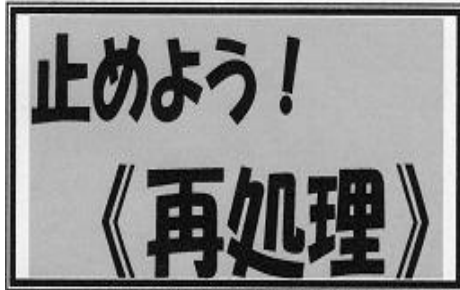
郵便振替 02240-5-102650

《再処理 / 岩手の環境》

http://homepage3.nifty.com/gatayann/env.htm

《まった再処理分庫》

http://briefcase.yahoo.co.jp/k\_imag



《天恵の海》

2009(平成21)年

7月 9日

第73号

編集事務局 S.Oshida

TEL・FAX 019-623-1636

原子力安全・保安院審議会の結論に異議あり!

# 直下活断層説の渡辺教授の質問に全く答えられず

## 渡辺教授と 国・原燃 ヒアリング

「直下に活断層」六ヶ所の海岸段丘のたわみを説明する渡辺満久教授 (昨年の現地説明会)



「公共事業をチエックする国会議員の会」主催ヒアリング  
審議会は 論議を尽くしていかない

新耐震基準による六ヶ所再処理工場の安全性を審査する専門家の作業部会である地震津波、地質地盤合同ワーキンググループの会議が六月二十四日開催され、(株)日本原燃から提出されていた六ヶ所再処理工場の耐震設計評価を妥当なものかと判断し二九日通知しました。しかし、変動地形学の渡辺満久教授らの直下に活断層があるとする学説は「新知見」ではないとして検討されませんでした。この審査はさらに原子力安全委員会において行われます。

### 異例の結論延期

五月一日の同ワーキンググループの会議では、委員のなかから「出戸西方断層から南に延びる断層評価が不十分である」との意見が出され、結論を延期してしました。しかし六月二十四日の会議で、原燃の報告を妥当と結論するに至りました。

公共事業チエック議員の会のヒアリング

この作業にあわせ国会議員有志でつくる「公共事業チエック議員の会」と市民は、三月二十七日に第一回ヒアリングを開催し、渡辺教授らの学説を新知見として専門家会議の俎上に載せ審査に万全を期すよう要請する「質問書」を国

### 再処理耐震安全審査年表

- 2006(平18)年
  - 9月、原子力安全委員会「原子炉など耐震設計審査指針」を改正。再審査開始。
- 2007(平19)年
  - 7月、中越沖地震で柏崎刈羽原発被害・評価見直し、11月、日本原燃「耐震評価報告書」提出
- 2008(平20)年
  - 5月、渡辺満久教授ら「直下活断層説」を発表。7月、岩手・宮城内陸大地震発生
- 2009(平21)年
  - 3月、国会議員・市民らのヒアリング(公聴会)。6月、ワーキンググループ「妥当」の結論、今回のヒアリング。

に提出していましたがその際詳しくは審議終了後に話し合いをもつというところで、第二回のヒアリングが六月二十九日に参議院議員会館で開催されました。出席者は近藤正道、福島みずほ、保坂展人、金田誠一、大島九州男の五議員と渡辺満久教授、岩手の会などの市民、国からは原子力安全・保安院、原子力安全委員会の担当者として日本原燃の担当者、とマスコミ数社でした。質問書の内容に答えられない原子力安全・保安院、質問書は、原燃が活断層の本体を見落としている具体的な事例大陸棚外縁断層との連続性について述べ、渡辺教授らの新知見を考慮

して結論を出すように要請してました。渡辺教授は「日本原燃は、私が「たわみ」であると示した斜面は、三段の段丘」としている。それではその「崖」はどこか?」「海上音波探査で活断層の有無がわかるのか」などの質問をしました。しかし驚いたことには、原燃や国の担当者はそれらに一切答えることが出来ず、原燃の評価を妥当とする結論が、納得のいく科学的な論議を経たものとはとても言えないことが明らかになりました。このような杜撰な審議でよしとする国の審議会の無責任さに参加者から中越沖地震の教訓が生かされていないと厳しく指摘する声上がり、改めて第三回ヒアリングを開催し説明を受ける事とし閉会しました。

60年経った今でも 細胞から  
伸びる2本の黒い線(放射線  
飛跡)  
TV画面から撮影



中島正洋准教授



七條和子助教

# 今でも細胞内で放射線を放出

## 原爆被ばく者から世界で初めて長崎大学研究グループ

NHKニュースが報道(「Uチューブ」から収録)

明瞭になった内部被ばくの脅威  
七條和子助教は、「細胞内の微少な放射線であるが、写真では、細胞核の横の方から一本の線が認められた。被ばくから六十年以上もたった今もなお骨や心臓、腎臓などの細胞の中で放射線を出し続けている様子がわかります。」と説明し、さらにこの放射線が原爆の原料である

「低線量だから安全」は大きな間違いだ  
このニュース映像を見た「岩手の会」の永田文夫さんは、「細胞に入り込んだプルトニウムなどアルファ線を発する放射線の写真はすでに発表されている。しかし今回の研究は六十余年前に被ばくした人々の臓器などの細胞が今でも放射線を出し続けている写真である。プルトニウム239の半減期は二万四千年。紙一枚で止まるから安全、などと言う人がいるがそれは大きな間違い。むしろ内臓に入れば探知も難しく、永久に細胞を攻撃し

続ける。内部被ばくの恐ろしさが可視化されて一層明確となった」と感想を語りました。

被ばくで傷つく細胞のDNA(遺伝子)

同TVはさらに皮膚ガンになった被ばく者の手術で切除されたガン周辺の細胞について観察した中島正洋准教授らの研究を報道しました。中島准教授は、「一見正常に見える細胞のDNA(遺伝子)が傷ついているケースが多く見られた」と報告しています。

左ひざを付いて作業をしていたが、高レベル放射性廃液の成分が、紙製の防護服や布製の作業服に染みだした作業員の汗を伝わって浸透したと見られる。  
【疑問な事】高レベル廃液の飛散したセル内で作業したのではなく隣室で作業したと言うが、放射能まみれの機具を修理するのは非常に危険な作業である。今後被ばく者が増加するのではないかと一人だけの作業だったのか。ガンマ線は防護服も透過する。彼の被ばく手帳の積算値はいくらになっていたのか？

使用済み燃料受け入れ・貯蔵建屋での作業で右足親指裏被ばく

【原燃発表】六月十九日午後四時ころ使用済み燃料受け入れ建屋の天井クレーン点検作業を行った

下請け会社作業員が退出する際の検査で右足親指裏の皮膚表面に1平方センチあたり約5ベクレルの放射性物質の付着を確認。直ちに除去した。

【疑問な事】使用済み燃料受け入れ建屋のクレーンの点検作業と汚染の関係が分からない。やはり、下請け会社作業員である。彼の被ばく手帳の積算値も知りたい。

保管されていた長崎被ばく死者の組織を撮影

長崎大学病院には原爆で死没された人々の内臓などの病理標本が保管されていますが、中島正洋准教授や七條和子助教らの研究グループは、七人の被ばく者の標本の組織を特殊な方法で撮影しました。ニュースのTV画面には写真のように明瞭な黒い線が映し出されました。

プルトニウムによるものであることも確認したと語りました。

放射線の被ばくには「外部被ばく」と「内部被ばく」があります。身体の外から放射線を浴びるのが、外部被ばく、呼吸や食物を通じて放射性物質を身体の中に取り込み、周囲の細胞や遺伝子が傷つけられるのが「内部被ばく」。この映像は内部被ばくを明瞭に捉えています。

## 六月二二件の被ばく 六ヶ所再処理工場の作業員

日本原燃のホームページの伝えるところによると、「安全宣言」を行ったばかりの六ヶ所再処理工場で二件の作業員の被ばく事故が発生しました。

モニターを修理中

【原燃発表】六月六日午後四時過ぎ、高レベル放射性廃液ガラス固化建屋セル内の、遠隔操作用具「パワーモニタ」を修理中

に被ばく

線量は0.4シーベルトで法令で定める年間被ばく線量限度500ミリシーベルトを下回る。すぐ洗い流したため健康への影響はない。男性は、同機具が取り付けられているクレーンの台車上で、